

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	高橋 照彦
論文題目	日本古代三彩・緑釉陶器の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>陶磁器は出土品として普遍的な存在で、釉薬や文様・形状などが多種多様な変化を示すことから、年代差や地域差を顕著に示す重要な考古資料となっている。陶磁器の背後には、生産体制や社会的機能・時代背景などの諸側面が潜んでいるが、それを外観・造形だけから判断するのは難しい。しかし、そのような非視覚的な側面は、陶磁器の重要な規定因子であり、それを追究せずには、陶磁器そのものを理解し、歴史像を構築することはできない。その点を念頭に置いて、本論文では、日本古代において最も高度で複雑な技術体系を有していた、三彩・緑釉陶器などの鉛釉陶器類を取り上げ、その表層の奥に隠れた歴史性を探ることに目標を据えた。</p> <p>ただ、研究の現状としては、年代差や産地差を明確にする初歩的な作業が必要な段階にあるため、まずは基礎的分析から着手した。また、考古資料の特性を生かしつつ、生産から流通・消費に至るまでの実相を明らかにすることも不可欠である。さらに、三彩・緑釉陶器の意義を理解するには、少なくとも土器・陶磁器全般との比較も無視できない。本論文では、それらの諸課題をふまえて、多面的な検討を加えることにより、三彩・緑釉陶器から古代日本の歴史像の一端を抽出するように努めた。</p> <p>以下、本論文の全体構成と概要を述べる。序章で示した三彩・緑釉陶器研究の現状と課題および用語整理を踏まえ、第Ⅰ部では、日本古代において三彩・緑釉陶器を生産した四つの地域、すなわち宮都周辺（平安京近郊など）、東海地域、防長地域、近江地域を対象として、各地域で生産された製品の実体を追究するために、分類と編年試案を提示した。また、その生産状況を復原したうえで、各生産地における基礎的な問題を論じた。形態・文様論のうち、平安緑釉の模倣対象については、第Ⅰ部の第二・四章で扱い、輸入陶磁器の模倣も確認できるが、むしろ金属器模倣が主であり、中国文物模倣と総括できることを明らかにした。</p> <p>第Ⅱ部では、奈良三彩や平安緑釉の全般に及ぶ基礎的な検討として、第一章で製作技術の問題、第二章で文献史料にみえる施釉陶器類の名称について取り上げた。いずれも、考古学と隣接領域の研究分野との総合化を企図したものであり、後章のための前提的な考察でもある。</p> <p>第一章では、化学分析成果の取り込みをめざした。奈良三彩・平安緑釉の釉薬の鉛同位対比は、ほぼ集中する値を示し、山口県長登あるいは蔵目喜周辺産の鉛を用いたことが明瞭となった。その前後の鉛釉（鉛ガラス）の原料調達については、7世紀第3四半期頃に海外産鉛を用いる段階があり、12世紀頃には対州鉾山などから鉛の供給を受けることも明らかにした。また、釉薬の化学組成には産地差があり、年代にともなって変化していることも指摘できた。さらに、釉薬に粘土などを加えた可能性などを指摘し、原料調達や調合の実態を明確にした。</p> <p>第二章は、文献史料を検討し、考古資料との橋渡しを一つの目標とした。まず「瓷器」について、10世紀後半以前は「青瓷」を指しており、その実体は基本的に国産の鉛釉陶器であると論証した。「茶椀」については、唐代において茶を飲む時に愛用した輸入陶磁器一般を指したが、『延喜民部省式』にみえる国産の瓷器に「茶椀」なる器種名が設定されたのは、それが中国陶磁模倣の器種であったためであることも明らかにした。そして、語義未詳の食器名として知られる「様器」に関しては、基本的に緑釉陶器の技術系譜を引く白色土器であるという結論を導いた。</p>			

第Ⅲ部は、第Ⅰ部で論じた各生産地の様相を統合することによって、三彩・緑釉陶器生産の展開過程を明らかにした。

第一章では、奈良三彩から平安緑釉に変容する画期に焦点を当てた。検討の結果、9世紀前半に新たに成立する尾張と長門の生産地は、中央主導の形で畿内から技術を導入していることを確認した。そして、議論が分かれていた「弘仁瓷器の伝習記事」は、工人を畿内で技術教習し、その工人を派遣して尾張や長門へ緑釉技術を移植するという過程の重要な一段階を示すもので、それは『延喜式』にみる年料雑器の中央への収取と直結するものと考えた。また、その背景として、弘仁期の国家的な儀式や饗宴における使用を主目的に、唐風文化を体現する高級食器としての位置づけが新たに鉛釉陶器に付与され、その国家的な需要が生産の転換を導いたものと判断した。

第二章では、第一章以降の生産の展開を扱い、生産地の拡散過程や生産体制、その史的背景などを考察した。まず、9世紀中頃には、公的用途に限定されない需要が増大したため、基本的に、各生産国内の技術により生産地が拡散した。この時期の緑釉陶器の生産体制としては、中央が介在する共通の規範のもとで、国衙による一定の関与が推測される。その後、旧来の生産国を越えて、三河・美濃・近江・丹波・周防などの新たな生産地が成立し、一層の在地的展開が起こるが、生産体制はそれ以前からの延長的な側面が残っていたと判断される。そして、11世紀前半代には、緑釉陶器生産はほぼ終焉を迎える。その背景としては、原材料の枯渇や需要の減少もあるが、むしろ旧来的な生産を維持できなくなったという、生産側の要因が大きいと考えた。

第三章では、時代をさかのぼって、平安緑釉以前の白鳳緑釉や奈良三彩を取り上げ、諸技術の伝播過程などを復原した。日本における鉛釉生産は朝鮮半島系技術を導入して開始され、7世紀中頃の百濟滅亡にともなう混乱等のなかで、朝鮮半島から日本への亡命者に、鉛ガラスや鉛釉を製造できる技術者が含まれていたと推測した。また、奈良三彩は白鳳緑釉と技術的に明確に区別され、前者の成立時には、唐から新たな技術を受け入れていたと考えざるをえない。遣唐使として派遣されたガラス製作技術者である「玉生」が、唐の技術をもたらしたものと推測した。

第Ⅳ部は、三彩・緑釉陶器の流通や消費の問題に焦点を当てた。

第一章においては、流通・消費を広い範囲で検討したのが第二・四節で、前者では時間軸とともに遺跡の性格差を、後者では地域差をおもに取り上げた。そして、一遺跡あるいは一地域の検討事例として、奈良三彩と平安緑釉を、それぞれ第三・五節で取り上げた。その結果、奈良三彩に関しては、おもに宗教的な使用形態が導き出された。平安緑釉については、平安京以外では、国府周辺域における出土が圧倒的に多く、館のような施設を持つ拠点的な集落などでも多く、高級食器としての流通がうかがわれた。また、旧国単位で平安緑釉を産地ごとに分けてカウントした結果、西日本と東日本では産地構成が異なることから、平安京を経由した一元的な製品流通ではないことを明らかにした。このほか、個別事例の検討でも、いくつかの知見を得た。たとえば、青森県三沢市の平畑(1)遺跡における平安緑釉の出土事例に関し、円形周溝墓を築くような「エミシ」の有力層が、平安京と結びつきのある人物から入手したと推測し、史料の少ない当該期の歴史解明にも、一材料を提供した。

第二章は、必ずしも確定的な見解に至っていない奈良三彩の代表として、正倉院の三彩陶器を取り上げ、既往の所説の根拠を問いなおし、その伝来の形態や製作契機などを推察した。まず、正倉院三彩の多くは天曆四年(950)に竊索院双倉から正倉院南蔵に移納されたという通説どおりではなく、奈良時代から正倉院に納められていた可能性が高い点を指摘し、その製作契機としては、盤類が藤原宮子一周忌齋会に製作されたほか、鉢類の多くが大仏に対する供養具として大仏開眼会あるいは大仏関連の年中行事の開始を契機として製作された可能性が高い点などを述べた。

第三章では、白鳳緑釉から奈良三彩まで続く施釉埴を検討し、仏教美術史的な研究との統合化により、使用方法などの歴史的評価を見定めようとした。水波文埴はいずれも須弥壇あるいは宝殿(厨子)などに敷かれ、浄土を表現する際に用いられていたことを解明するとともに、その点から個別の歴史事象を導き出した。草創期の興福寺が川原寺の浄土表現を取り入れており、川原寺を受け継ぎつつ、それに替わる四大寺としての地位を占めるようになったと判断されること、東大寺や阿弥陀浄土院の出土例などをもとに、橘三千代→光明皇后→孝謙天皇という三代の女性による阿弥陀浄土再現に向けた信仰の軌跡が辿れることや、海外からの断続的な浄土美術の流入過程を復原できることなどを指摘した。

第四章は、消費形態として宮中などの儀礼の場における平安緑釉の使用が重要と考えることから、第Ⅲ部までの検討成果もふまえて、その歴史的意味を議論した。国家的な儀礼での緑釉陶器の使用と、その場を彩る建物への緑釉瓦の採用から、平安初期前後には天皇を頂点とする秩序維持のために、唐風の国家的儀式の整備に対し強い関心が払われていたことを確認した。そして、平安京への遷都はその一つの画期であるとともに、全面的な唐風化を押し進める形で、一応の完成点をなすのは弘仁期前後という点を、出土文物から裏づけた。また、緑釉陶器が無釉化した白色土器の歴史的意義についても、外来文化を受容した上での和風化の姿と評価でき、それらの中で、儀式装置の変化や継承、価値観の変容と各地での受容度などを議論しようとした。

第Ⅴ部は、三彩・緑釉陶器を対象に含めつつ、土器類全般を取り上げて、その史的背景を幅広く検討していく試みをした。いずれも、考察の中で文献史学などから導き出されている成果を取り込み、また、その検証も試みようとしている。

第一章は、奈良時代の土器などを言及する際によく引用される「律令的土器様式」あるいはその後の土器様式に関して再検討したものである。既往の「律令的土器様式」とされるものは、「宮都型食膳具様式」と呼ぶのがふさわしく、その背景には宮内での給食の際に、盛るべき食品を機械的に振り分けるためには、法量分化した食膳具や須恵器や土師器の混用が適していたからだと想定した。そして、その様式の成立期は、藤原京の条坊制の導入以前に「京」という特別な空間が出現した頃で、実質的には、官人等を大規模に京に集住させたことに対応し、システムティックな給食体制を必要としたことが契機となったと考えた。

第二章では、第Ⅲ部第一章でおもに論じた嵯峨朝(弘仁期)に前後する桓武朝と仁明朝を取り上げた。その土器様相を具体的に再整理するとともに、弘仁期に顕著となる唐風化への道筋が生まれた桓武朝や、弘仁期頃の極端な唐風化への反動的な動きも芽生える仁明朝など、古代から中世への変容過程を示す時代相を抽出した。

第三章では、平安京とその周辺に地域を絞りつつ、時代を奈良時代頃から中世以降まで広げて検討し、平安京や京都の都市化の推移を推察した。第二章が時間を一定にして地域的な差異をみていくのに対し、第三章は地域を限定して、時間軸を広げて時期的差異を明らかにする試みである。検討の結果、出土土器からすると、京とその近郊との生活落差が顕著になるという点で、9世紀中頃に画期を見いだすことができ、史料にみる都鄙意識が鮮明になる時期に先行して、生活実態としての都鄙間格差が拡大していたことが明確になった。その頃に、平安京の都市化における大きな転換点を見いださう可能性がある。そして、その格差は宮都の成立段階にも萌芽がうかがわれ、中世後半には相対的に均質化の方向をたどっていることが推測できた。

第四章は、酒宴の器に注目して、奈良時代から中世におよぶ変遷過程や歴史的意味を論じた。第二章が時期、第三章が地域を限定するのに対して、本章は機能を絞り込みつつ、長い時間軸で検討を試みた。そこでは、饗宴において、その内容や使用者によって多様な種類の器を使い分けている実態を整理した。そして、9・10世紀の饗宴や日常生活において土師器を頻繁に用いる要因として、和風への再評価や穢れの除去

をめざす短期廃棄などが考えられた。また、鎌倉など武家社会で土師器が儀礼的食器として多用される背景としては、京都の公家文化へのあこがれだけでなく、平安時代以来の武家の伝統を継承する側面と、和風や俗への価値を強める院政期の食器構成の反映や、武家における公家の儀礼の部分的で選択的な受容の側面が無視できない。さらに、室町時代頃から散見する武家故実としての式三献（三盃）は、公家文化における三献の「様器」すなわち白色土器を用いることに由来すると推測でき、式三献は公家文化と武家文化の融合の産物と評価した。

終章では、以上の検討成果のまとめとして、三彩・緑釉陶器の歴史的特質について、いくつかの観点から整理した。すなわち、意匠としては、奈良時代の表層上の唐風化にとどまっていたものから、平安期に全面的な中国文物を指向するようになったこと。用途としては、奈良時代に宗教祭器（奉献具）であったのが、平安期に実用食器（食膳具）へと変容したこと。生産体制としては、奈良時代の中央による独占状態から、平安期に地方への技術委譲した形になったこと、などの特質を指摘した。さらに、鉛釉の技術系譜として、朝鮮半島系の基層技術に中国系の三彩技術が重層し、さらに日本的な伝統とも融合しつつ生産が展開していく事実を指摘し、他の時代の窯業技術導入とも比較して、類似した導入状況と時代背景が存在する点を述べた。

付章は、日本古代の三彩・緑釉陶器を考える上で不可欠な存在である唐三彩についての基礎的考察である。とりわけ、日本で最も出土数が多い陶枕の諸問題や唐三彩の成立に関して、新たな視点から検討した。その結果、陶枕とされるものの実際の用途に関して多くの見解が示されているが、本来は頭枕であるとみなすのが適当である点を示した。また、陶枕などに用いられた象嵌手法などを新たに意義づけ、唐代の木製品にみる木画や象嵌に類する他の手法を、陶磁器の世界に持ち込んだものであることを示した。そして、初期唐三彩には、従来指摘されていた金属器の模倣だけでなく、木製品や漆製品など、当該期の調度品なども含めて、非窯業製品がモデルとして積極的に導入されている事実を解明した。

以上述べたように、本論文においては、日本古代の三彩・緑釉陶器を中心として、文献史料や化学分析データなども踏まえて多面的な検討を加え、踏みこんだ形で歴史像を構築した。

(論文審査の結果の要旨)

土器や陶磁器は、考古学における年代差や地域差を考える基準資料である。本論文は、日本古代の土器・陶磁器のなかで、最も高度で複雑な技術体系を有する施釉陶器の一つである鉛釉陶器（三彩・緑釉陶器）を主題とする。鉛釉陶器は土師器や須恵器などの日常雑器とは異なり、宮都や国府、寺院など古代の政治施設や宗教施設などで多く出土する。したがって、その研究は、年代差や地域差だけでなく、それを生みだした古代社会の政治・宗教のあり方を顕著に映し出す。論者は、日本各地の三彩・緑釉陶器を広範に調査し、生産地や年代を確定した上で、生産体制や流通形態の変遷を明らかにし、三彩・緑釉陶器を使用した場所を検討し、その背後にある社会機能・時代背景を多面的かつ通時的に考察した。現時点における日本古代の三彩・緑釉陶器研究における最高水準を示す論考とあって過言ではない。以下、本論文の構成に従って、論者が明らかにした成果のなかで顕著なものを取りあげる。

第Ⅰ部では、三彩・緑釉陶器を生産した四つの地域、すなわち宮都周辺（平安京近郊など）、東海地域、防長地域、近江地域で生産された緑釉陶器を分類・編年し、各地域における生産の実態を明らかにした。とくに、通常の土師器や須恵器とは異なる器形や文様のモデルを追究し、従来の輸入陶磁器模倣説に加えて金属器をはじめとする各種の中国文物に起源することを示したのは、重要な成果である。

第Ⅱ部では、化学分析成果を踏まえ、鉛釉薬の産地に関し、初期には海外産もあるが、奈良・平安時代を通じて山口県長登や蔵目喜産であったと整理し（第一章）、史料にみる「瓷器」「青瓷」「茶椀」「葉椀」「様器」が何を指すのか、具体的に検討・整理する（第二章）。隣接分野にも、十分かつ入念な目配りをする論者の研究姿勢がわかる。

第Ⅰ・Ⅱ部の成果を踏まえ、第Ⅲ部では三彩・緑釉陶器生産の展開過程を、歴史的背景も含めて考察する。従来の、地域ごと時代ごとの編年や生産地論では達成しえなかった、論者ならではの三彩・緑釉陶器生産論である。すなわち、9世紀前半にはじまる尾張・長門の緑釉陶器生産は、中央主導で技術を地方に移植したもので、年料雑器の中央収取に直結する。その背景に、鉛釉陶器が唐風文化を体現する国家的儀式や饗宴の場で使用する高級食器として位置づけられ、その国家的な需要が生産を大きく転換させたと考察する（第一章）。9世紀中頃には、公的用途に限定されない需要が増大し、各生産国内の技術を踏まえて、生産地が拡散する。その背景には、中央が介在した共通規範があっても、各国衙の関与が推測される。さらに旧来の生産国を越え、三河・美濃・近江・丹波にも生産は拡大するが、11世紀前半には緑釉陶器生産はほぼ終焉する。その背景には、原料の枯渇や需要の減少だけでなく、従来の生産体制が維持できなくなったという生産側の要因を重視する（第二章）。第三章では日本鉛釉陶器の起源に関し、7世紀中頃の百濟滅亡にともなう亡命者に鉛ガラスや鉛釉の技術者がおり、奈良三彩は遣唐使で派遣された「玉生」が唐の技術をもたらしたとする。

第Ⅳ部では、三彩・緑釉陶器の流通・消費に注目する。奈良三彩が宗教的な場で消費され、平安緑釉の消費地が平安京以外では国府周辺に集中する事実などは、従来も指摘されていた。しかし、旧国単位で平安緑釉を産地ごとにカウントし、分布から平安京経由で再配分されたものではなく、各生産地から直接もたらされたと論証した点などは、広範な資料調査を実施した論者ならではの成果である（第一章）。奈良三彩の代表である正倉院三彩の由来を問い直した成果（第二章）、白鳳緑釉から奈良三彩に至るまでの施釉埴を、一貫した浄土表現ととらえた考察（第三章）、緑釉瓦を葺いた平安宮での平安緑釉の使用を唐風の国家的儀式の整備ととらえ、緑釉陶器の無釉化すなわち白色土器の出現を和風化とする論（第四章）などは、異論の余地はあるとはいえ、古代日本における三彩・緑釉陶器の歴史的意義についての独自

の提言である。

第V部では、古代土器全般を取り上げ、三彩・緑釉陶器の歴史的背景を幅広く検討する。古代土器の特色とされる「律令的土器様式」論の再考（第一章）、唐風国家儀式の前後となる桓武朝・仁明朝土器様式の解明（第二章）、平安京と近郊の土器を比較し都鄙意識に生活格差が先行した事実を指摘したこと（第三章）、酒宴の器を古代・中世を通じて考察した第四章など、三彩・緑釉陶器研究成果を踏まえて、従来の古代土器の研究成果に対しても新たな提言をおこなっている。

消費圏が生産地を中心に広がる日常雑器の研究は、各地域単位で進められてきた。しかし、三彩・緑釉陶器は宮都や地方官衙に消費が集中することもあって、地域単位ではなく、日本列島各地で出土した資料に目配りしつつ、生産地論・年代論・変遷論・流通論を組み立てて、資料の持つ歴史的意義を追究する必要がある。論者の資料調査は、北は律令制の範囲外にある青森県から北部九州にまでおよび、それをもとに組み立てた三彩・緑釉陶器論は他者の追随を許さない。導いた考察もきめ細やかで、細部において異論の余地はあるとしても、様々な可能性を配慮し、穏当な結論を導いている。現時点における三彩・緑釉陶器研究の最高水準を示すと評した理由である。

しかし、日本の鉛釉陶器の起源は中国大陸・朝鮮半島にある。近年、その起源地における調査研究成果も蓄積しつつあるが、論者は付章において一部の見通しを述べたにとどまる。東アジア規模での鉛釉陶器研究は緒に付いたばかりで、その研究は本論文の成果を踏まえつつも、当然、論者にその見直しを迫るはずである。どこまでそれに対応するかは、論者に課せられた今後の大きな課題となるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年9月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。